

## (2) 地下水汚染

地下水は、一度汚染されると浄化が非常に難しく、未然に防止することが重要です。

大阪市では、水質汚濁防止法の規定に基づく「水質測定計画\*」により、地域の全体的な地下水質の概況を把握するために実施する「概況調査」、概況調査などによって発見された汚染について、汚染範囲を確認するために実施する「汚染井戸周辺地区調査」、そして汚染井戸周辺地区により確認された汚染地域について継続的に監視を行うために実施する「継続監視調査」を行っています。

## 5 水文化

水文化は、人々が築き上げてきた水に関わる有形・無形の活動やその成果のことで、学習によって継承されるとともに、民族・地域・社会の相互の交流によって発展します。

古墳時代には、難波が古代日本の玄関口として、大陸からの渡来地・使節往来の拠点として発展し、平安時代には天満橋から北浜にあった渡邊津は、熊野詣の起点になり、四天王寺、住吉大社を経て熊野へ通じる熊野街道を多くの人々が行き来しました。

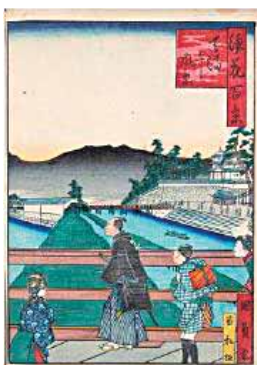
安土桃山時代には、豊臣秀吉は大坂本願寺跡に初代の大阪城を築城後、東横堀川、西横堀川、阿波堀川などを開削し、海運・水運の拠点大坂を築きました。

江戸時代には、淀川や新たに開削された堀割\*を中心に、大阪は商業都市として発展し、水辺は人々の生活の場となっていました。盛夏には川面に遊山船\*（ゆさんぶね）を浮かべて川涼みを楽しみ、花火船、広告船、講釈船などが川面を埋め尽くすほどに浮かび、「舟遊び」は大阪の名物となりました。

これらの文化のいくつかは形を変えて今でも残っていますが、時代の移り変わりとともに、人々と水との関係は薄れてきました。

### (1) 浪華八百八橋

大阪を巡る多くの堀川には、多くの橋が架けられました。しかし「浪華八百八橋」という言葉は誇張された言葉で、実際に江戸時代の市内の橋は200橋程度であったといわれています。



■天満ばし風景 歌川国員画  
(大阪府立中之島図書館所蔵)

出典：大阪の川（大阪市建設局）



■心斎橋碑



■難波橋

\*の付いている語句は、巻末資料で解説を記載しています。

現在は多くの堀川が消え、橋もなくなりましたが、心齋橋、四つ橋そして長堀橋など地名として多く残され、橋のあった場所の近くには往時をしのぶ碑が建てられています。

現在では市内に800近い橋が架かっており、その中には港大橋や新千歳橋、夢舞大橋のような現代橋梁技術の粋を集めた数多くの橋があります。また、難波（なにわ）橋、天満橋、そして天神橋は浪華三大橋と呼ばれ、ライオン橋の愛称で親しまれている難波橋は、大阪市民が最も好きな橋ランキングの1位に選ばれました。

## (2) 祭

大阪の夏を彩る風物詩として千年の歴史を誇る「天神祭」は、日本三大祭りの一つに数えられており、江戸時代には天満地域一帯の大商人たちを中心に、船渡御\*（ふなとぎよ）が盛大に行われていました。現在も堂島川、大川では多くの船が出て、花火も打ち上げられ、百数十万人の見物客に楽しまれています。

その他、毎年淀川では8月に「正蓮寺の川施餓鬼\*（かわせがき）」が、住吉大社では6月14日に「御田植（おたうえ）神事\*」が行われています。



■摂州難波橋天神祭の図（諸国名所百景）歌川広重（初代）画（大阪府立中之島図書館所蔵）

出典：水の都・大阪周遊map（大阪市建設局）



■正蓮寺の川施餓鬼

出典：大阪市ホームページ



■住吉大社の御田植神事

出典：住吉大社ホームページ

## (3) 水売り

近代上水道が敷設される以前の大阪は、飲料水に悩まされていました。井戸水のほとんどが飲み水としては適していなかったため、生活用水として用いられていました。

そのため、明治20年頃までは、飲み水の多くは「水売り」とよばれた人々により、水船で市中各所へ運ばれ、水桶で各家庭に届けられていました。そうした水汲み場のひとつが今の源八橋（北区）上流にありました。このように飲み水が川から供給されるほど、川の水は澄んでいました。

## (4) 舟 運

かつて大阪には、人々の往来のための渡船場が各所にありました。昭和10年（1935年）頃には渡船場31箇所、保有船舶数69隻を数えました。現在では、橋やトンネルが整備され、安治川、尻無川、木津川の3河川の8箇所で運航するのみにりましたが、年間200万人以上（平成20年）の人々が利用しています。

\*の付いている語句は、巻末資料で解説を記載しています。



■渡船場の場所

- ①天保山渡船場
- ②甚兵衛渡船場
- ③千歳渡船場
- ④落合上渡船場
- ⑤落合下渡船場
- ⑥千本松渡船場
- ⑦船町渡船場
- ⑧木津川渡船場



■天保山渡船

出典：大阪市建設局ホームページ

近年、市内の水上演光が見直され、各種の船便が生まれました。主として大川、寝屋川を航路とする定期便である大阪水上バスは、大阪城公園、天満橋、淀屋橋などの棧橋を結び、多くの観光客に利用されています。



■水上バス

出典：大阪市ホームページ



■なにわ探検クルーズ

出典：大阪市建設局資料

この他、大川、土佐堀川、堂島川、木津川、道頓堀川、東横堀川からなる水の回廊\*を巡るなにわ探検クルーズ、バイエリアを周遊できる帆船型観光クルーズなども行われています。

## 八軒家浜

京都から淀川を下ってくる伏見船\*や三十石船\*は、大川の左岸、天満橋のたもとにあった八軒家浜で人と荷物の上げ下ろしを行っていました。八軒家浜とは、八軒の運送（飛脚）問屋が店を並べていたことに由来しますが、荷役の拠点としてのみではなく、熊野詣の出发点であったことでも大いに賑わいました。

現在、国、大阪府、大阪市そして経済界などが協働して、八軒家浜をあらたな水の都の拠点として再生する事業を進めています。また、平成21年（2009年）に、水の都・大阪の復興を広く伝えるためのシンボルイベントとして開催された「水都大阪2009」では、大きなラバーダックが浮かべられて話題になりました。



■かつての八軒家浜のにぎわい  
「澱川兩岸一覽」より

出典：世界に誇る水都・大阪  
(大阪ブランド戦略推進会議)



■現在の八軒家浜

(水都大阪2009で浮かべられたラバーダック)

出典：Hiromitsu Morimoto  
<http://www.hetgallery.com/>

\*の付いている語句は、巻末資料で解説を記載しています。